中期中観派における自性 (svabhāva) 解釈

—— rang bzhin と ngo bo nyid の用例を中心に ——

那 須 真 裕 美

I はじめに 空を標榜する中観派にとって、恒常不変の「自性」(svabhāva) の否定は中観派に共通する議論の立脚点であった。だが後代チベットでは、無自性論者について説く文脈において、自立論証派を ngo bo nyid med par smra ba, 帰謬論証派を rang bzhin med par smra ba と区別して表現する例が見られる¹⁾。自立論証派と帰謬論証派の相違の一因として、前者が世俗として自性を認めたのに対し、後者は世俗としても認めない点を挙げるができる。

各々の中論釈の同箇所に表示れる svabhāva の訳語を比較すると、PP では ngo bo nyid, PSP では rang bzhin という異なった訳語が与えられている。無論、サンスクリット原典と比較可能なバーヴィヴェーカ著作におけるすべての svabhāva が、ngo bo nyid と訳されているのではなく、チャンドラキールティ著作におけるすべての svabhāva が、rang bzhin と訳されているのではない。

II PP と PSP 第 15 章に見る訳語の相違とチャンドラキールティの自性解釈 rang bzhin と ngo bo nyid という訳語を重視して見るならば、PP 翻訳者ルイゲンツェン (Klu' i rgyal mtshan) は、MMK 第 15 章で用いられる svabhāva を ngo no nyid と、prakṛti を rang bzhin と訳した。これに対して、PSP 翻訳者ニマタク (Nyi ma grags) は svabhāva と prakṛti 双方を rang bzhin と訳していることが分かる。

na sambhavaḥ **svabhāvasya** yuktaḥ pratyayahetubhiḥ / hetupratyayasambhūtaḥ **svabhāvaḥ** kṛtako bhavet // (MMK15.1)

[PP] ngo bo nyid rgyu rkyen las // 'byung bar rigs pa ma yin no //

rgyu dang rkyen las byung ba yi // ngo bo nyid ni byas par 'gyur //

[PSP] rang bzhin rgyu dang rkyen las ni // 'byung bar rigs pa ma yin no //

rgyu dang rkyen las byung ba yi // rang bzhin byas pa can du 'gyur //

prakṛtau kasya cāsatyāmanyathātvaṃ bhaviṣyati / **prakṛtau** kasya ca satyāmanyathātvaṃ bhaviṣyati // (MMK15.9)

[PP] rang bzhin yod pa ma yin na // gzhan du 'gyur ba gang gi yin //

rang bzhin yod pa yin na yang // gzhan du 'gyur ba ji ltar rung //

[PSP] rang bzhin yod pa ma yin na // gzhan du 'gyur ba gang gi yin //

rang bzhin yod pa yin na yang // gzhan du 'gyur ba ji ltar rung //

PP15. 1 と PSP15. 2 には svabhāva の語義解釈がなされており²⁾、ともに svabhāva を「自らの性質、本質」(svo bhāvaḥ, rang gi ngo bo) と解釈する。しかし、これらの箇所においても各々の翻訳者に採用された svabhāva の訳語は、PP では ngo bo nyid, PSP では rang bzhin であった。

このように採用する訳語の相違は、バーヴィヴェーカとチャンドラキールティ双方の自性解釈の差違を反映しているのだろうか。チャンドラキールティの自性解釈の特徴の一つとして、世間的にももの「自らの性質、本質」だと考えられる火の熱さなどの性質を、凡夫にとっての自性であると否定的に解釈する点が挙げられる。

世間の人々は、人為的に作られた性質を自性とは呼ばず、火の熱さ等の「本来そのものに具わっている性質」を自性と呼ぶ。だがチャンドラキールティは、これを凡夫レベルの解釈であり、中観論者(ヨーギン)はその解釈の妥当性を認めないとする。世間の人々の言う火の熱さ等は「因と縁によって生じたもの」(hetupratyayañhitam) であって、「作られたもの」(kṛtakam) であるので、ヨーギンの立場からは自性ではない。すなわち、火の熱さは凡夫にとっては自性であるが、ヨーギンは自性とは認めない。これは、彼の唯世俗 (saṃvṛtimātra) 理解、ひいては二諦に対する解釈に関連するものである³⁾。また彼の自性解釈の特徴として、自性とは法性であり空性であるとする解釈も示すことができる。

諸々のものには法性 (dharmatā) があり、これこそがその自相である。では、この法性とは何か。諸々のものの自性である。その自性とは何か。本性 (prakṛti) である。この本性とは何か。空性 (śūnyatā) である。この空性とは何か。自性のないこと (naiḥsvabhāvya) である。この自性のないこととは何か。真如 (tathatā) である。真如とは何か。あるがままの状態であり、変化しないことであり、常に必ず存続していることである⁴⁾。

この記述は、唯世俗あるいは二諦説に基づかないと矛盾が生じる。火にとっての熱さが自性ではなく、自性が法性であると言うならば、この「法性 (dharmatā) = 自性 (svabhāva) = 本性 (prakṛti) = 空性 (śūnyatā) = 無自性 (niḥsvabhāvya) = 真如 (tathatā)」という関係は、「自性=無自性」となる時点で成立しない。だが、チャンドラキールティは、第2項の「自性」を肯定的、あるいは勝義的な自性として、第5項の「自性」を否定されるべき、凡夫が把握する世俗的な自性と理解した。

同箇所のみマタク訳では、[chos nyid (dharmatā) = ngo bo (svabhāva) = rang bzhin (prakṛti) = stong pa nyid (śūnyatā) = rang bzhin med pa (niḥsvabhāvya) = de bzhin nyid (tathatā)] として、否定されるべき対象である第5項の svabhāva を rang bzhin に、空性や真如と等しい第2項の svabhāva を ngo bo としている⁵⁾。

Ⅲ Bhāviveka 著作中の“svabhāva”とその自性解釈 バーヴィヴェーカの自性解釈の特徴は、世俗においては自性 (ngo bo nyid)・自相 (mtshan nyid) を認め、勝義としてはそれらを認めないと言う点にある⁶⁾。この解釈は、ヨーギンの立場から svabhāva (rang bzhin) を凡夫の把握する自性であるとして否定したチャンドラキールティの解釈とは明らかに異なる。

PP 第15章における svabhāva の訳語の用例として、バーヴィヴェーカの PP における svabhāva が、チャンドラキールティの PSP が rang bzhin と訳される同箇所において、ngo bo nyid と訳されていることは、先にも確認した通りである。だが、PP15.8 の記述を例に取ると、そこには rang bzhin と ngo bo nyid が混在している。

ci 'i phyir dngos po 'i bdag nyid rang bzhin gyis yod pa nyid yin na / gzhan du 'gyur ba nyid du mi 'dod ce na / de 'i phyir dngos po 'i mtshan nyid kyi / rang bzhin gzhan du 'gyur ba ni // nam yang 'thad par mi 'gyur ro // zhes smras te / me 'i tsha ba 'i mtshan nyid kyi rang bzhin grang ba nyid du mi 'gyur ba bzhin no zhes bya bar dgongs so // de 'i phyir de ni chos mi mthun pa 'i dpe 'i tshig yin te / dper na brtag pa la byas pa nyid yod par mi rigs pa bzhin no // 'dir rjes su dpag pa ni don dam par nang gi dngos po rnam la ji ltar rtog pa 'i ngo bo nyid yod pa ma yin te / gzhan du 'gyur ba 'i phyir dper na chu 'i reg pa med dang phrad pas / tsha ba 'i dngos por gyur pa la don dam pa pa 'i tsha ba 'i ngo bo nyid med pa bzhin no // ⁷⁾

MMK15.8-9 は prakṛti を議論の対象としており、先掲の MMK15.9 にも見るように PP では prakṛti を rang bzhin と訳し、svabhāva を ngo bo nyid と訳すことことから、以下のように対応させることができよう。

「何故、ものの自体が prakṛti として存在するならば変化がありえないのか」というならば、それ故に、ものの本質である「prakṛti が変化することは決してあり得ないからである」(MMK15.8cd) という。火に熱性という特徴を有する prakṛti があれば、それが冷たくはならないように、という意である。それ故に、これは異喩にあたる。恒常なるものには作られたものという性質があることはないように。そして、論証式が次のように構成される。

(宗) 勝義という観点から、内的な諸々のものには妄想されているような svabhāva はない
(因) 変化するが故に

(喩) 水の感触が火と会って熱となる場合、勝義としての熱さの svabhāva がないように
ルイゲンツェンは、MMK 引用部あるいは取意部の prakṛti を rang bzhin と訳し、

バーヴィヴェーカの論述部分、とくに論証式においては ngo bo nyid (svabhāva) を用いている。とくに、「恒常なるものには作られたものという性質があることはない」のが svabhāva を指すことは明らかであることから、 prakṛti と svabhāva (rang bzhin と ngo bo nyid) を同義として考えた読みとしよう。

また、中観派の最も重要な命題である「自性が空であること」(rang bzhin stong pa nyid) を例にすると、PSP の用例を適用するならば⁸⁾、rang bzhin stong pa nyid は svabhāvaśūnyatā を訳したとみなされる。しかし、PP 記述中の用例に従うならば、prakṛtiśūnyatā になるのだろうか。prakṛti と svabhāva を同義として訳したと仮定するならば、rang bzhin stong pa nyid が svabhāvaśūnyatā の訳語であったと考えることはできないだろうか。

バーヴィヴェーカの著作を管見した中で、rang bzhin stong pa nyid が svabhāvaśūnyatā を訳した例を、MHK3.115 において確認することができる。

svabhāvaśūnyatābodhān nivr̥ttes tanmater api / akṣayaḥkṣayidharmatvaṃ prāpnoty aprāptiyogaḥ //

rang bzhin stong nyid rtogs pa 'i // de yi blo yang zlog gyur pas //

zad med mi zad chos nyid 'thob// thob pa med pa'i tshul gyis so //

MHK の翻訳者はルイゲンツェンではなく、ツルティムギャルワ (Tshul khriṃs rgyal ba) である。単純に訳語の使用頻度という点から MHK 第 3 章を概観すると、svabhāva を rang bzhin と訳すのは上掲の 1 例のみであり、対する ngo bo nyid は 10 例を確認することができる。この傾向は、PP 第 15 章と類似している。また、論証式に取り上げられた svabhāva の訳語として ngo bo nyid を使用する例は、MHK 3.26 をはじめ認められる。この点においても PP、ひいてはルイゲンツェンの訳語用法の傾向との類似性があると言えよう。

また、ツルティムギャルワは MHK における svabhāva の訳語として、ngo bo nyid に次いで dngos nyid も用いる。また、MHK3.156 において、svabhāvaśūnyā が dngos nyid stong と訳されることから、ngo bo nyid と dngos nyid を同義と解した可能性が考えられる。

V 結 語 PP あるいは MHK にあらわれる svabhāva (ngo bo nyid) と PSP に見られる svabhāva (rang bzhin) は、等しいのか異なるのか。例えばニマタク翻訳の解釈では、ngo bo nyid と rang bzhin がシノニムとして用いられているとは推測しがたい。しかし、ルイゲンツェンの解釈では、ngo bo nyid と rang bzhin が、そしてツルティムギャルワの解釈も加えるならば dngos nyid もほぼ同義として用いられる点を鑑みて、現段階ではルイゲンツェン訳の ngo bo nyid とニマタク訳の rang

bzhin は、同様の svabhāva を解したものであると言えよう。本稿では、パーヴィヴェーカとチャンドラキールティの自性解釈の違いは、両者の世俗としての立場の解釈に起因するものであり、訳語の差異に単に表れているのではないと考える。

略号

MMK *Mūlamadhyamakakārikā* (Trans. Jñānagarbha, Klu'i rgyal mtshan Rev. Hasumati, Nyi ma grags)

de Jong ed. *Mūlamadhyamakakārikāh*, The Adyar Library and Research Centre, 1977

MHK *Madhyamaka-hṛdaya-kārikā* (Trans. Dīpamkarasrījñāna, Tshul khrim rgyal ba)
江島恵教『中観思想の研究』春秋社, 1980

TJ *Madhyamaka-hṛdaya-vṛtti-tarkajvālā* (Trans. Dīpamkarasrījñāna, Tshul khrim rgyal ba)
Iida, S., *Reason and Emptiness*, Hokuseido Press, 1980

PP *Prajñāpradīpa-mūlamadhyamakavṛtti* (Trans. Jñānagarbha, Klu'i rgyal mtshan)
P. No. 5253, D. No. 3853

PSP *Prasannapadā* (Trans. Mahāsūnati, Nyi ma grags Rev. Kanakavarman, Nyi ma grags)
P. No. 5260, D. No. 3860

Poussin, L.V. ed. *Mūlamadhyamakakārikās de Nāgārjuna avec la Prasannapadā*
Commentaire de Candrakīrti, Bibliotheca Buddhica IV, 1970

1) Lam rim chen mo (The Collected Works of rJe Tsong kha pa Blo bzang grags pa, vol. 20, 279)

2) PP15.1ab(D.157b4), PSP15.2ab(p.260 ll.4-5) 3) cf. MABh ad MA6.28 (p.108 ll.13-20) チャンドラキールティの二諦解釈に関しては、拙稿「中観派における vyavahārasatya の解釈」『佛教学研究』第 57 号 (2003), 「中期中観派における世俗諦解釈」『佛教学研究』第 58/59 号 (2005) で論じた。 4) PSP15.2cd (p.264 l.11- p.265 l.1) 5)

この文脈では、無自性として否定されるべき svabhāva 以外にも、rang bzhin と訳している項目がもう 1 つある。prakṛti である。木村氏の指摘によれば、PSP には l.1 (p.26 l.6), 7.13 (p.159 l.7) の 2 箇所、prakṛti と svabhāva が並列されるとする。これらの場合には、prakṛti を rang bzhin に、svabhāva を ngo bo nyid と訳している。PSP と同じくニマタクの翻訳である Lakṣaṇānūsārīṇī でも、svabhāva を ngo bo nyid, prakṛti を rang bzhin に訳している。(木村誠司「『中論』における svabhāva について」『駒澤短期大学仏教論集』9, 2003 p. 407 参照) 6) TJ ad. MHK3.26 (p.86 ll. 11-19) 7) PP15. 8cd (D.160a7-b2) 8)

[rang bzhin gyis stong pa] bhāvasvabhāvasūnya 18.7 (p.368 l. 8) 26. 12 (p.560 l. 2), svabhāvasūnya 17.32 (p.331 l.1) 23.13 (p.461 l.9) [rang bzhin gyis stong pa nyid] svabhāvasūnyatā 26.11(p. 559 l.5) [rang bzhin gyis stong pa 'i phyir] svabhāvasūnyatātvāt 22.13 (p.447 l.10) [rang bzhin gyis stong pas] svabhāvasūnyatātvāt 17.20 (p. 323 l.14)

〈キーワード〉 自性, パーヴィヴェーカ, チャンドラキールティ

(龍谷大学非常勤講師)

In this paritta ritual, monks invite many devas to the place of the ritual, and offer some words that include a request to devas. At the end of the ritual, monks cause the devas to return. This paritta ritual resembles rituals of Hindu pūjā in structure.

187. Some Problems of the Bodhisatta's Birth in the *Nikāya*

Shin AMANO

The purpose of this paper is to point out that the description of the Bodhisatta's birth scene including "the gāthā at birth" in the *Nikāya* is that of the former Buddha's birth scene. In the *Nikāya*, the Bodhisatta's birth scene of this type is contained in the *Acchariyabbhutadhammasutta* (MN. 123, MN. III pp.118-124. = *Acch*). It is similar to the Bodhisatta Vipassin's birth scene in the *Mahāpadānasuttanta* (DN. 14, DN.II pp.1-54. = *MAP*). If we compare the two birth scenes more minutely, we notice that the introductory portion in *Acch* which contains "the conversation about the former Buddhas among the bhikkhus" is related to the description of "the characteristics of the former Buddhas" in *MAP*. In addition, a parallel description of the *Acch* introduction is found in *MAP*, and its Sanskrit and Chinese versions, but the location of the parallel description is different. From this, we can comprehend that the introduction in *Acch* was originally the introduction to "the characteristics of the former Buddhas". Thus, it can be said that the Bodhisatta's birth scene in *Acch* is that of the former Buddha's in *MAP*, and that the Bodhisatta's birth scene including "the gāthā at birth" had been handed down as the former Buddha's birth scene in the *Nikāya*.

188. On the Interpretation of *svabhāva* by Middle Period Mādhyamikas

Mayumi NASU

The term *niḥsvabhāvavādin* was represented by *ngo bo nyid med par smra ba* and *rang bzhin med par smra ba* in later Tibetan Buddhism. The former is the Svātantrikas and the latter is the Prāsaṅgikas. In Bhāviveka's *Prajñā-*

āpradīpa, Klu'i rgyal mtshan translated *svabhāva* into *ngo bo nyid*, but in Candrakīrti's *Prasannapadā*, Nyi ma grags translated *svabhāva* into *rang bzhin*, though they are equally commentaries on *Mūla-Madhyamaka-kārikā*. I would like to focus on the different translations of *svabhāva* from Sanskrit to Tibetan. In the light of their intentions, I understand the words *ngo bo nyid* by Klu'i rgyal mtshan and *rang bzhin* by Nyi ma grags as synonyms. Therefore I suggest that the difference between Bhāviveka's and Candrakīrti's interpretation of *svabhāva* is not simply represented by the usage of *ngo bo nyid* and *rang bzhin* but results from their distinctive understandings of *saṃvṛti*.

189. A Problematic School Named 'Sautrāntika' (2)

Wasō HARADA

The purpose of this paper is to produce counterevidence to the claim that a heterodox group within the Sarvāstivāda school was called pejoratively "*Dārṣāntika*" by orthodox Sarvāstivādins.

190. On *anulakṣaṇa* and *anavasthā*

Yoshihiko NASU

I treat the discussion of a fault of infinite regress (*anavasthā*) of four characteristics (*saṃskṛtalakṣaṇa*) and four secondary characteristics (*anulakṣaṇa*) in the *Mahāvibhāṣā*. Against the criticism that there is a fault of infinite regress in a theory of four characteristics, the Sarvāstivāda-Vaibhāṣikas make three types of responses in the *Mahāvibhāṣā*.

(a) Some Sarvāstivāda-Vaibhāṣikas respond that there is no fault, even if there is an infinite regress.

(b) Other Sarvāstivāda-Vaibhāṣikas respond that there is no fault because there is no infinite regress. This response is based on the theory that three dharmas occur at the same moment when dharmas arise.

(c) Orthodox Sarvāstivāda-Vaibhāṣikas respond that there is no fault be-